

## 第9章 自然環境

### 第1節 環境の状況

#### 1 地勢【自然環境課】

本県は、本州中部の太平洋側に位置し、三河湾を懐に抱えるほか、伊勢湾及び太平洋にも面しています。県土面積は5,165km<sup>2</sup>で、東西106km、南北94kmにわたっています。

海岸環境実態調査(平成13年度 愛知県)によると、本県における海岸総延長は約598kmで、そのうち自然海岸が約37km(全体の6%)、半自然海岸が約124km(同21%)、人工海岸が約426km(同71%)、河口部が約11km(同2%)となっています。

また、本県には木曾川、庄内川、矢作川、豊川といった大河川を始め多くの河川があり、豊かな

水系を作り出しています。

近年は干潟、藻場に関心が集まっていますが、これまでの自然環境保全基礎調査によれば、本県の干潟としては、伊勢湾(知多半島西岸海域)及び三河湾において約2,062haが確認されています(調査対象となった面積1ha以上のものの合計。藻場についても同じ。)。また、藻場は、伊勢湾、三河湾及び遠州灘(渥美半島南側海域)において約859haが確認されています。なお、本県海域ではサンゴ礁は確認されていません。

#### 【用語】

**自然環境保全基礎調査**：自然環境保全法に基づいて環境省が行っている。昭和48年度を第1回として、以後おおむね5年ごとに実施されている。平成17年度から平成21年度にかけて、第7回調査が実施された。

県では、この調査や県独自の自然環境保全調査の結果等を基に、本県の自然環境の現状把握に努めている。

**自然海岸**：海岸(汀線)に工作物が存在しない海岸。

**半自然海岸**：潮間帯(高潮海岸線と低潮海岸線の間)には工作物がないが、後背海岸(潮間帯の背後にあり、波の影響を直接受ける陸地)には工作物が存在する海岸。

**人工海岸**：潮間帯に工作物が設置されている海岸。

**干潟**：干出と水没を繰り返す平坦な砂泥底の地形で、内湾や河口域に発達する。浅海域生態系のひとつであり、多様な海洋生物や水鳥等の生息場所となるなど重要な役割を果たしている。

**藻場**：海藻・海草の群落を中心とする浅海域生態系のひとつであり、海洋動物の産卵場や餌場となるなど重要な役割を果たしている。

#### 2 植物【自然環境課】

本県の気候は、太平洋を流れる黒潮の影響により一般に温暖で、夏期多雨、冬期小雨型となっています。こうした気候の影響を受け、植物区分は、奥三河山地の一部が温帯に属するほかは大部分が暖帯に属しています。

また、本県の植生は潜在的にはほとんどが照葉樹林帯に属しますが、平野部では古くから宅地、農地等としての土地利用が進んだため、シイ・タブを中心とした自然植生は社寺林などにわずかに残っているにすぎません。

一方、丘陵から山地部の多くの部分はスギ及びヒノキを中心とした人工林となっていますが、都市近郊の丘陵部を中心にコナラ、アベマキ等を主体とする二次的植生の森林(二次林)地域も広く見られ、いわゆる里山を形成しています。

植物種については、気候条件や地形・地質など本県の多様な自然環境を反映し、シデコブシ、シラタマホシクサ等、「東海丘陵要素」と呼ばれる東海地方固有の種も多く見られ、野生状態で生育する植物全体では約2,720種(維管束植物約2,220種及びコケ植物約500種。移入種等を除く。)が確認されています。

これまでの自然環境保全基礎調査によると、人為の影響を受けた植生（二次林）は県土面積の1割強、人為的に成立した植生（植林地）は3割強となっており、植生自然度の高い自然草原、自然林及び自然林に近い二次林は2%と非常に少ない状況です。

また、植生の一定の生態的なまとまりである植物群落については、環境省の特定植物群落として県内98か所が選定されています。これらの大部分は天然記念物、自然環境保全地域、自然公園区域等の地域に含まれ保護されていますが、保護規制のない一部の特定植物群落については、今後、対策の検討が必要です。

### 3 動物【自然環境課】

本県に生息する動物相は地形・地質や植物との関連から、希少な動物の生息も少なくありません。

哺乳類（海生哺乳類を含む）は、県北東部の山地を中心に64種（外来種を除く）の生息が確認されています。近年の開発などにより、これら哺乳類の生息数はニホンザル、イノシシ、ニホンジカ等の一部の種を除き減少しつつあり、生息区域も次第に三河山間部へ狭められるなどの退行現象が見られます。

鳥類は398種（外来種を除く）が観察記録されています。本県は日本のほぼ中央に位置するため、南方系・北方系両方の鳥の分布が見られ、庄内川、新川、日光川の河口干潟、汐川干潟等、国内でも屈指の規模の干潟は、ダイゼン、ハマシギ等多くのシギ・チドリ類の越冬地やアオアシシギ、キア

シシギ等の渡りの中継地となっています。また、木曾川、矢作川、豊川の河口付近などはスズガモ、オナガガモなどのカモ類を中心とした水鳥の大規模な越冬地に、渥美半島、知多半島、木曾川筋等は国内の主要な渡りのルートとなっています。さらに、伊良湖岬はサシバの渡りの中継地として知られています。

平成26年1月の全国一斉ガン・カモ類生息調査では、県内全域でカモ類5万8,556羽が観察されました。これは全国で観察された162万6,903羽の3.5%を占め、全国第6位の飛来数でした。

このように豊かな鳥相を示す本県の状況ですが、その重要な生息地である干潟、自然海岸等の消失により生息状況への影響が懸念されています。

爬虫類は15種（外来種を除く）、両生類は20種（外来種を除く）の生息が確認されていますが、哺乳類・鳥類と同様にその生息地は次第に狭くなってきています。とりわけ、良好な水環境にしか生息しないサンショウウオ類や、太平洋側の自然砂浜海岸でしか産卵できないアカウミガメの保全が課題になっています。

このほか、淡水産魚類51種、昆虫類約7,600種、クモ類512種（外来種を除く）、陸・淡水産貝類180種及び内湾産貝類約350種（昆虫類以外、外来種を除く）の生息が確認されています。

※各動植物の種数については、以下の資料による。

【植物】「レッドデータブックあいち2009植物編」（平成21年3月発行）、【哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、淡水産魚類、昆虫類、クモ類、陸・淡水・内湾産貝類】「レッドデータブックあいち2009動物編」（平成21年3月発行）

#### 【用語】

**植生自然度**：人為が加えられている程度に応じて、植生を10段階に区分したもの。

**二次林**：伐採後再生した森林など過去に伐採等の人手が加えられ、その影響を受けている森林又は、現在も下草刈りなど継続的に人手が加えられていることにより成立している森林。

**里山**：林学的には農用林を意味しており、農家の裏山の丘陵や低山地帯に広がる薪炭生産、堆肥や木炭の生産、木材生産など農業を営むのに必要な樹林、奥山に対して農地に続く樹林、容易に利用できる樹林地帯などを指す。この里山は、昭和30年代の燃料革命、あるいは土地所有者の高齢化等により利用されなくなり、放置又は開発の対象となりやすくなっている。近年、希少種を含む多様な生物の生息生育空間として、また、身近な自然環境の一つとして、その適正な保全、利用が課題になっている。

## 第2節 自然環境保全に関する施策

### 1 自然公園の保護と利用【自然環境課】

#### (1) 自然公園の指定状況

本県は、海岸、島しょ、山地、河川等の優れた自然の風景地に恵まれています。これらを保護し、末永く後世に引き継ぐとともに、誰もが野外レクリエーションを楽しみ、動植物や地質などの自然を学ぶことができるように指定された地域が自然公園です。

自然公園は、土地の管理権の有無を問わずに環境大臣又は県知事が指定することができ、一定の公用制限のもとで風景の保護を図るとする「地域制」の公園です。地域内では林業や農業が営まれ、自然公園であると同時に産業の場、生活の場とも

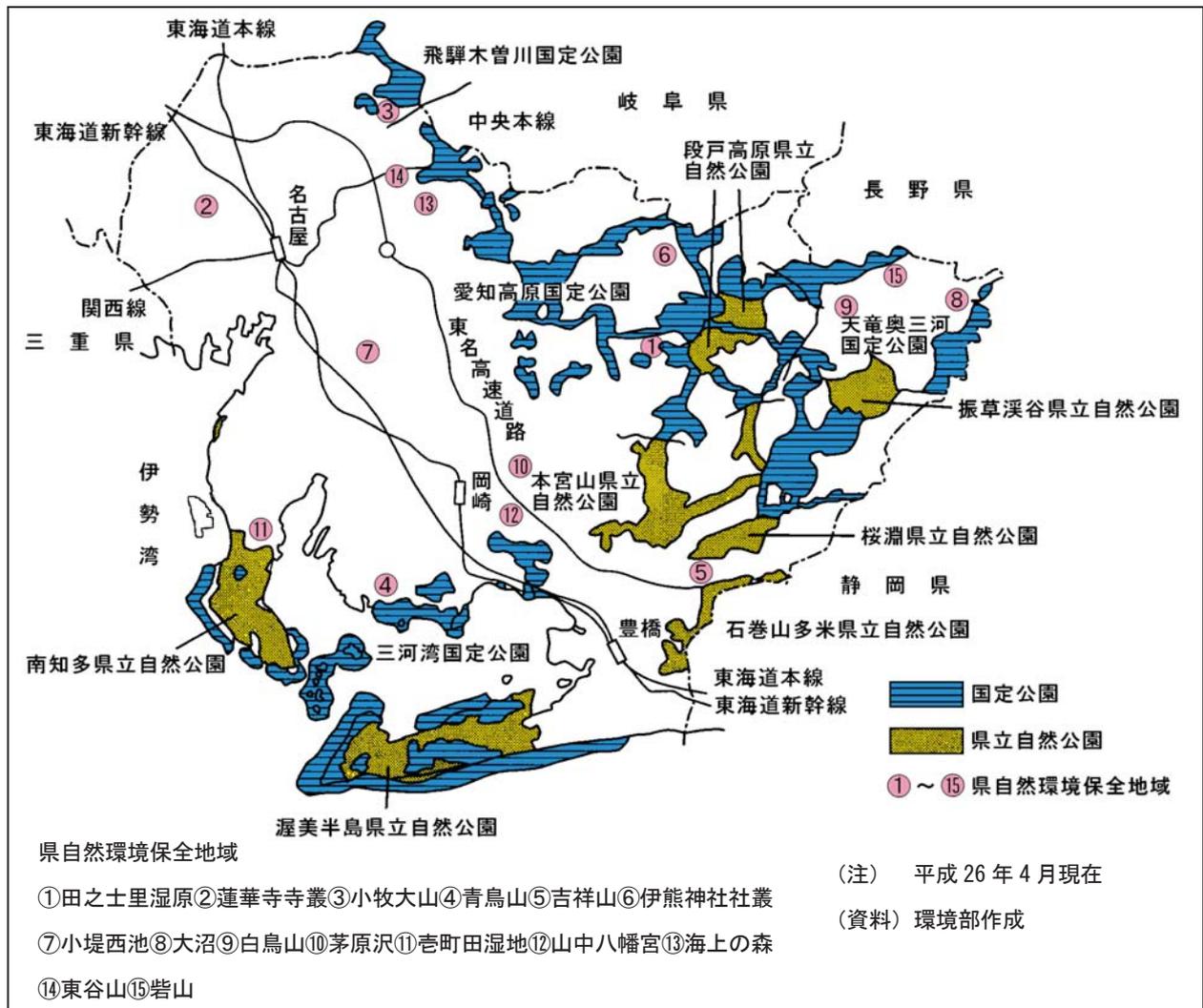
なっています。

県内には、自然公園法に基づく4つの国定公園と愛知県立自然公園条例に基づく7つの県立自然公園が指定されています。(図9-2-1)

本県の自然公園の陸域総面積は、平成26年4月現在88,881haで、県土面積の17.2%を占めており、これは全国平均の14.4%を上回っています。

これらの自然公園は昭和33年から45年にかけて指定され、公園ごとに定められた公園計画により管理されています。また、土地利用状況の推移等を踏まえながら区域及び公園計画について順次見直しを行い、自然公園の保護及び利用の適正化を図っています。

図9-2-1 愛知県内の自然公園・自然環境保全地域の指定状況



## (2) 自然公園の管理

### ア 風致景観保護のための行為規制

自然公園の優れた風景地を保護するため、公園計画に基づき区域内に特別地域及び特別保護地区（県立自然公園は特別地域のみ）を指定し、地域内の風致や景観を損なう現状変更行為等を規制（許可制）しています。その他の区域については、普通地域として、公園の風景に支障を及ぼすおそれのある一定規模以上の行為を規制（届出制）しています。平成25年度の公園内における**自然公園法**又は**愛知県立自然公園条例**による行為許可、届出の処理件数は計1,226件（前年度1,114件）であり、前年度とほぼ横ばいとなっています。

また、開発面積が、特別地域においては1ha以上、普通地域においては10ha以上になる大規模な開発行為については、学識者による自然環境の実態やそれに及ぼす影響等の事前調査を事業主体の責任において実施させ、自然公園の保護を図っています。

### イ 自然公園施設の整備

自然公園資源を生かし、自然と親しむことで人々の保健や休養に資するとともに自然保護に対する認識を深めることを目的として、県は、面ノ木公園施設を始めとする3つの自然公園施設や総延長211km（県内）の東海自然歩道を設置しています。

県はこれらの施設について標識、便所、休憩所などの整備・修繕を順次進めており、平成25年度は主に伊良湖休暇村公園施設及び東海自然歩道（瀬戸市内）の再整備を行いました。なお、清掃や除草等の維持管理は地元市町等に委託しています。

また、環境省が主唱する「全国・自然歩道を歩こう月間」（毎年10月）に合わせ、人々の自然への理解を深めることを目的とした「全国・自然歩道を歩こう大会 愛知県大会」を愛知県ウォーキング協会と共催で実施しています。

## クローズアップ

### 伊良湖休暇村公園(再整備エリア)の愛称を「いらごさららパーク」に決定しました

田原市中山町地内にある伊良湖休暇村公園については、三河湾国定公園にふさわしい施設として、平成25年度から平成29年度の5年間で、老朽化した屋外プールを撤去し、かつてこの地域にあった砂丘とオアシス（湧水）を再生し、この地域固有の海浜性の植生を復元する公園整備を進めています。

新しく生まれ変わる伊良湖休暇村公園が人々に親しまれる施設となるよう愛称を募集したところ、全国から1,396点もの応募があり、選考の結果、愛称を「いらごさららパーク」に決定しました。

また、本公園整備のうち、季節によって様々な浜辺の花が観賞できる「花の広場」、浜辺の砂を利用したイベントが可能な「砂の広場」、小さなお子様でも水遊びができる「水の広場」の3つの広場が完成したことから、平成26年10月24日に一部供用開始しました。

多くの皆様のご来園をお待ちしています。



いらごさららパーク

## 2 自然環境保全地域の保全【自然環境課】

### (1) 自然環境保全地域の指定及び現況

優れた自然環境を保全するには、開発の影響を受ける前に先取的に保全を図ることが肝要です。こうした趣旨から、県は、**自然環境の保全及び緑化の推進に関する条例**に基づき、優れた自然環境を有する地域を自然環境保全地域として指定し、その保全に努めています。平成22年4月には、名古屋市の東谷山及び豊根村の砦山を、それぞれ県内14番目及び15番目の自然環境保全地域に指定しました。

今後も、優れた自然環境を有する県内地域を自然環境保全地域に指定し、適切な保全を図っていきます。

### (2) 自然環境保全地域の維持管理

自然環境保全地域を適切に保全するには、人為的改変を極力防止するとともに生態学的な見地に基づいた保全を図らなければなりません。こうした趣旨に沿って、県は次のような方策によりその維持管理に努めています。

#### ア 保全事業等の実施

良好な自然環境を保全するための巡視歩道の補修、除草等の維持管理を実施しています。

#### イ 監察の実施

県、地域環境保全委員が、地元市町村の協力を得ながら監察、巡視等を行い、環境破壊の防止に努めています。

#### ウ 追跡調査の実施

動植物及び地形・地質の学識者で構成する県環境審議会専門調査員による追跡調査（現地確認調査）を定期的実施し、生態学的見地からの環境変化のチェックをしています。

〈平成25年度追跡調査地域〉

小牧大山、吉祥山、小堤西池、茅原沢

## 3 生態系の保全

### (1) 生態系ネットワークの形成【自然環境課】

生態系ネットワークの形成とは、生きものの生息・生育に必要な森や水辺等の多様な環境を、一体的に保全・再生しようとするものです。

生きものの生息・生育空間を保全・再生し、将来にわたって生物多様性が確保されている県土づくりを進めていくためには、保全すべき自然環境や優れた自然環境を有している重要な地域を核として、これらを緑地や水辺などによって有機的につなぐことにより、生態系ネットワークを形成していく必要があります。

そこで本県では、県民や企業、大学、NPO、行政といった地域の様々な主体が目標を共有できるよう、平成22年度に生きものの生息可能性を示した「生物多様性ポテンシャルマップ」を作成しました。

また、生態系ネットワークを形成するための具体的手法を模索し、検証して具体的方法を確立することを目指して、平成22年度から24年度まで県内3地域（東部丘陵、知多半島、西三河）において、生態系ネットワーク形成モデル事業を実施してきました。3地域では、企業、大学、NPO、行政等の多様な主体が参加する生態系ネットワーク協議会が設立され、地域の特徴を踏まえた生物多様性保全に向けた取組が進められています。

併せて、平成23年度から有識者等による検討会の指導・助言を得つつ、モデル事業の検証や生態系ネットワーク形成手法の検討をすすめました。

そして、平成24年度末に策定された「あいち生物多様性戦略2020」の中核的な取組に位置けるとともに、生態系ネットワーク形成の手順等を示した「自然環境の保全と再生のガイドライン」を作成しました（平成25・26年度の2年間試行）。

さらに、モデル事業の3地域以外においても、地域に応じた生態系ネットワークのあり方やテーマ、指標種等を検討する生態系調査を実施した3地域（尾張北部、新城設楽、東三河）で協議会が設立され、具体的な取組が進められています。

平成25年度には渥美半島地域で、平成26年度には西三河南部地域で生態系調査を実施しており、今後も順次、生態系調査を実施し、調査が終了した地域から生態系ネットワーク協議会を設立して、県内展開を図っていきます。

加えて、平成26年度から、あいち森と緑づくり

税を活用し、多様な主体の協働による生態系ネットワーク形成の取組を支援していきます。

**(2)「生態系保全の考え方」の策定【自然環境課】**

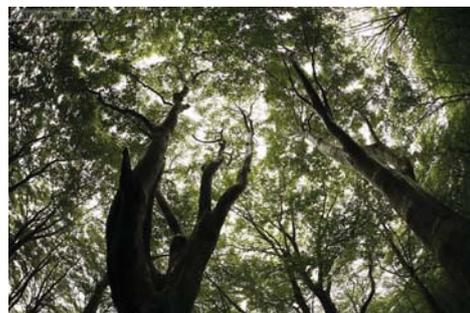
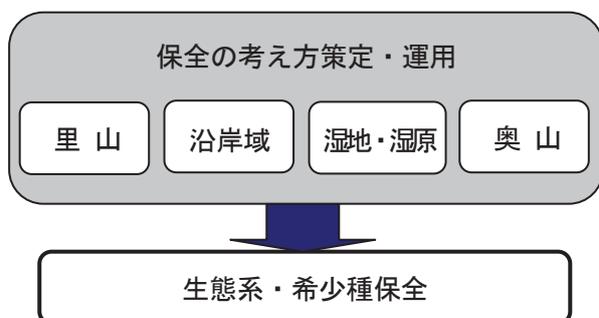
希少種の保全には、特定の地域における個別種の保全のみでは不十分であり、希少種の生息・生育環境により分類された生態系を単位とした保全

策を講じていく必要があります。

このため、県は、保全すべき生態系を「里山」、「沿岸域」、「湿地・湿原」及び「奥山」の4つに区分し、平成14年度以降順次、生態系ごとの保全の考え方を策定しました(表9-2-1)。

表 9-2-1 「生態系保全の考え方」等の策定状況

名称(策定期期)	内容・特色
里山生態系保全の考え方 (平成14年度)	オオタカ等猛禽類の生息環境を里山生態系の指標とした。
沿岸域生態系保全の考え方 (平成16年度)	沿岸域の生物生息機能や水質浄化機能に着目し、保全の考え方を示した。
湿地・湿原生態系保全の考え方 (平成18年度)	湿地・湿原の保全活動を行う際の考え方等を示した。
奥山生態系保全の考え方 (平成20年度)	奥山を人と自然が共生し多様な生き物が生息・生育できる場とすることを目指す環境カルテを示した。



面の木峠ブナ林

**(3) 希少種保護のための種と保護区の指定【自然環境課】**

県は、自然環境の保全及び緑化の推進に関する条例を平成20年3月に改正し、希少な野生動植物の保護を図るため、絶滅のおそれのある種の中でも特に保護の必要がある種を、指定希少野生動物種に指定して捕獲や採取等を規制しています。また、その中で特に生息・生育地の保護を必要とする種については、生息地等保護区を指定し、環境改変行為や立ち入り等の規制をしています。

指定希少野生動物種については、平成22年3月に11種を指定し、生息地等保護区については、平成24年3月にハギクソウが生育する田原市内2地区を指定しました(表9-2-2)。

今後も周知や監視等を行い、希少野生動植物の保護を図っていきます。

**(4) レッドデータブックあいちの作成【自然環境課、環境調査センター】**

メダカやゲンゴロウなど、かつては身近に見られた生きものや、湿地・湿原や干潟など限られた環境にしか生きられない生きものなどの希少な野生動物を絶滅させないためには、絶滅のおそれのある種の生息・生育環境を的確に把握したうえで保全策を講じることや、希少な動植物の保全について県民の理解を深めることが必要です。

そこで、県内の絶滅のおそれのある野生動物の生息・生育環境を把握・整理し、これらの種の適正な保全施策を推進するため、県は、平成21年3月にレッドデータブックあいちを改訂し、「レッドデータブックあいち2009」を作成しました。また、平成22年3月には「絶滅のおそれのある愛知県の野生生物 レッドデータブックあいち2009の概要」を作成しました。

表 9-2-2 条例に基づく指定希少野生動植物種・生息地等保護区

指定希少野生動植物種 (平成 22 年 3 月 30 日指定)		生息地等保護区 (平成 24 年 3 月 16 日指定)	
鳥類	コノハズク	名称	区分
は 爬虫類	アカウミガメ	田原市伊良湖町ハギクソウ生育地保護区	管理地区
両生類	ナガレタゴガエル	田原市小中山町ハギクソウ生育地保護区	管理地区
淡水魚類	ウシモツゴ		
昆虫類	ヒメヒカゲ		
クモ類	ミカワホラヒメグモ		
貝類	オモイガケナマイマイ		
維管束植物	ナガバノイシモチソウ		
	シロバナナガバノイシモチソウ		
	ハギクソウ		
	ナガボナツハゼ		



ハギクソウ

(5) 移入種対策【自然環境課】

人為的に海外から持ち込まれた外来生物の一部が、在来種を圧迫したり、在来種と交雑することで生態系をかく乱したり、人の身体及び農林水産業に影響を及ぼしたりすることから、平成 17 年 6 月に**特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律**(外来生物法)が施行されました。

これを受け、県では、この法律の規制内容や被害の予防方策の周知と啓発に努めるとともに、特定外来生物の生息状況等の把握に努めています。

また、平成 20 年 3 月に**自然環境の保全及び緑化の推進に関する条例**を改正し、人為的に移入され

た動植物種のうち地域の生態系に著しく悪影響を及ぼすおそれのあるもの(以下「移入種」という。)の公表を行うことを決めました。

これまでに、平成 22 年 6 月から平成 24 年 3 月まで計 29 種を移入種として決定し、公表しました。なお、ヒガタアシについては、平成 26 年 6 月 11 日に特定外来生物に指定されたことにより、県の条例公表種から除外されましたので、現在の条例公表種は 28 種です(表 9-2-3)。

今後も県内の移入種の情報収集と被害予防方策の周知や啓発等を行い、地域における防除の取組を進めていきます。

表 9-2-3 生態系に著しく悪影響を及ぼすおそれのある移入種（条例公表種）

哺乳類	ハクビシン	維管束植物	スイレン属 (ヒツジグサを除く。) ※3
鳥類	コブハクチョウ		ハゴロモモ
は 爬虫類	アカミミガメ		ハビコリハコベ (園芸名：グロッソスティグマ) ※4
	ワニガメ		ナガバオモダカ
淡水魚類	オヤニラミ		キショウブ
	カラドジョウ		トウネズミモチ
	ナイルティラピア		タカネマツムシソウ
甲殻類	チチュウカイミドリガニ		ボンボンアザミ
	タテジマフジツボ種群 (タテジマフジツボ、アメリカフジツボ、ヨーロッパフジツボ) ※1		ノハカタカラクサ
	貝類		モウソウチク
貝類	スクミリンゴガイ		アツバキミガヨラン
	ホンビノスガイ		ウチワサボテン属
	サキグロタマツメタ		
昆虫類	クワガタムシ科 (県内在来種・亜種を除く) ※2		
	タイワンタケクマバチ		
	ホソオチョウ		
	アカボシゴマダラ		

※1 これら3種は分類上近縁で形態的にもよく似ていることから、タテジマフジツボ種群としてまとめて取り扱う。

※2 県内在来の種または亜種であるミヤマツヤハダクワガタ、マダラクワガタ、チビクワガタ、ルリクワガタ、トウカイコルリクワガタ、ミヤマクワガタ、オニクワガタ、ノコギリクワガタ、ヒメオオクワガタ、アカアシクワガタ、コクワガタ、スジクワガタ、ヒラタクワガタ、オオクワガタ、ネプトクワガタを除く。

※3 スイレン属のうち、ヒツジグサは県内在来種であり、移入種ではない。

※4 これまで和名が付けられていなかったため、園芸名についても表記した。



スクミリンゴガイ  
(ジャンボタニシ)



トウネズミモチ



パラワンオオヒラタクワガタ



スイレン属 (ヒツジグサを除く)



キショウブ



ミシシippiaアカミミガメ

平成 23 年に豊橋市南部の梅田川河口付近において、国内で初めてヒガタアシ（学名：スパルティナ・アルテルニフロラ）が発見されました。

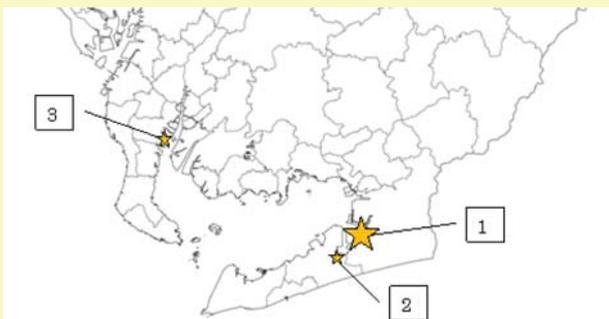
ヒガタアシは、イネ科の植物で繁殖力が非常に強く、汽水域で分布を拡大し、干潟に侵入するとそこを草原化させるなど地域の自然環境に非常に大きな悪影響を与えるおそれがあります。また、現段階では侵入経路が不明であるため、早期の発見と駆除が不可欠です。

このヒガタアシについては、根絶を目指して専門家の指導・助言を得ながら、国・地元の市・中学校・企業・NPO 等の関係機関と連携協力し駆除を行った結果、豊橋市内の一部の地点を除いて駆除を概ね完了しました。

今後、引き続き国・市等の関係機関と連携協力し、侵入状況等の監視を実施し、早期発見、早期駆除に努めていきます。

○生育が確認された場所と現在の生育状況

これまで生育が確認された場所	現在の生育状況（平成 26 年 10 月時点）
1 豊橋市大崎町及び老津町地内	港湾区域水路内の一部の地点で、国と県が設置した防草シートによる生育抑制を実施し、監視しています。その他で生育があった梅田川、山崎川、紙田川では、駆除を完了し、監視しています。
2 田原市豊島町地内	駆除を完了し、現在のところ生育は確認されていません。
3 半田市乙川末広町地内	駆除を完了し、現在のところ生育は確認されていません。



生育が確認された場所



掘り取ったヒガタアシ



駆除（防草シート設置）前（平成 25 年 9 月）



駆除（防草シート設置）後（平成 26 年 3 月）

【ヒガタアシについて：「あいちの外来種」ウェブページ】

<http://www.pref.aichi.jp/kankyo/sizen-ka/shizen/gairai/index.html>

## 4 野生鳥獣の保護管理

### (1) 鳥獣保護事業【自然環境課】

鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律により、鳥類、哺乳類に属する野生動物の捕獲は原則として禁止され、その保護が図られています。

鳥獣の保護を推進するため、県は、国の基本指針に即して「鳥獣保護事業計画」（第11次の計画期間：平成24年4月1日から平成29年3月31日まで）を策定し、鳥獣保護区等の指定、鳥獣捕獲許可の許可基準、特定鳥獣保護管理計画の作成等について定めています（表9-2-4）。なお、平成26年11月1日現在の鳥獣保護区等の指定状況は表9-2-5のとおりです。

また、鳥獣保護事業を円滑に進めるため、52名の鳥獣保護員を県内各地に委嘱し、鳥獣保護区、休猟区などの管理、狩猟者の指導取締り、鳥獣保護思想の普及啓発、鳥獣関係の諸調査等を行うとともに、傷病鳥獣の保護に関する指導相談委託業務として82名の指導獣医が保護指導に当たっています（表9-2-6）。

さらに、鳥獣を始めとした野生生物の保護思想の普及啓発を図るため「野生生物保護実績発表大会」を開催し、平成26年度は、参加した9団体の中から、野生生物を知り、親しみ、守る優れた活動を行った岡崎市立生<sup>おいだいら</sup>平小学校と豊田市立滝脇小学校の2校に知事賞を授与しました。

表 9-2-4 第11次鳥獣保護事業計画の主な計画内容

項目	計画内容	
鳥獣保護事業計画の方針	第10次計画の課題に加え、鳥獣の適切な保護管理や鳥獣保護区の指定等は、生物の多様性の確保や生態系ネットワークの形成に繋がるもので、COP10で採択された愛知目標の達成に向けた重要な要素である。第11次計画では、人と鳥獣の共生を目指して、これらの取組を実施するものとする。 また、鳥獣の保護管理を実施するにあたっては、鳥獣被害防止特措法による取組みと連携を図り実施するものとする。	
狩猟鳥獣	ツキノワグマは狩猟対象獣であるが、本県の希少獣のため、第10次計画に引き続き、狩猟者に対し狩猟の自粛を依頼。	
鳥獣保護区の指定	現状では、鳥獣による農作物被害が増加。被害軽減を図るため、鳥獣保護区の新規指定は行わない。ただし、地域からの要望がある場合は、指定を検討する。	
特例休猟区の指定	稲武西部特例休猟区（豊田市）の1か所を指定。	
捕獲許可	許可対象者	有害鳥獣捕獲・個体数調整について、JA等の法人による申請で複数人の従事者による場合は、狩猟免許を取得していない者も捕獲の補助に携わることを可能とする。
	空気銃による捕獲対象の拡大	有害鳥獣捕獲・個体数調整において、空気銃による大型獣類を除く鳥獣の捕獲を認める。ただし、大型獣類については、取り逃がす危険性が少ない状況においての使用を認める。
	捕獲実施時の留意事項	イノシシ檻によるツキノワグマの錯誤捕獲を防ぐため、脱出口付の箱ワナの使用や餌の種類を工夫などの指導や放獣体制の整備に努める。
	愛玩飼養のための捕獲許可基準	愛玩飼養目的での捕獲を禁止する。
狩猟者の減少抑制	狩猟者確保のため、狩猟免許試験を年2回実施（うち1回は休日実施）する。	
その他	環境学習の推進や傷病鳥獣の取り扱い、感染症への対応などについて記載。	

表 9-2-5 鳥獣保護区等指定状況（平成 26 年 11 月 1 日現在）

区 分	箇所	面積 (ha)
鳥獣保護区	67 【1】	25,265 【770】
鳥獣保護区 特別保護地区	4 【1】	439 【323】
休猟区	3	1,785
特定猟具使用禁止区域（銃・わな）	134	216,125
指定猟法禁止区域（鉛製散弾）	1	7,275

（注）【 】は国指定で外数 （資料）環境部作成

表 9-2-6 野生傷病鳥獣の指導獣医による保護指導実績（平成 25 年度）（単位：羽・頭）

放鳥獣	死亡	その他	合計
81 (30種)	67 (28種)	69 (32種)	217 (46種)

（注）1 「その他」の例：保護飼養中、他施設移送など  
2 種数には重複があるため、合計とは一致しない  
（資料）環境部調べ

（2）鳥獣害対策【自然環境課、農業振興課】

近年、ドバト、カラス等のフンや鳴き声による生活環境の被害、イノシシ等による農作物等への被害が発生しています。平成 25 年度の鳥獣による農作物被害は約 3 億 9,612 万円で、内訳は鳥害 1 億 8,780 万円、獣害 2 億 832 万円となっていま

す。

こうした被害への対策として、一般的には侵入防止柵の設置や追払い、餌となる物の除去等の防除対策、捕獲許可を得た上での捕獲などが行われています。

県は、中山間地域の農林業等に深刻な被害を与えているイノシシ、ニホンザル、ニホンジカ、カモシカの 4 種について、適正な保護管理を実施するための「特定鳥獣保護管理計画」を策定し対策を推進しています（表 9-2-7）。

さらに、農作物被害防止のため、捕獲檻の整備や侵入防止柵設置の支援、鳥獣被害対策研修会の開催、鳥獣被害対策実施隊設置の推進、農林水産業者等への啓発、指導等を実施しています。

また、平成 19 年 12 月に鳥獣による農林水産業等に係る被害の防止のための特別措置に関する法律が成立したことにより、市町村は、同法に基づき被害防止計画を作成して主体的に被害防止対策に取り組むことが可能となりました。平成 25 年度末で、26 市町村で被害防止計画を作成しています。

今後は他の市町村における被害防止計画の作成と同計画に基づく総合的・効果的な取組を推進していきます。

表 9-2-7 特定鳥獣保護管理計画の概要

項目	ニホンザル	イノシシ	ニホンジカ	カモシカ
対象区域の考え方	群れ等の分布域及び農林業等の被害状況等を踏まえ選定	分布域及び農林業被害の状況等を踏まえ選定	分布域及び農林業被害の状況等を踏まえ選定	分布域を踏まえ選定
対象区域	豊橋市、岡崎市、瀬戸市、豊川市、豊田市、蒲郡市、新城市、設楽町、東栄町、豊根村の10市町村	豊橋市、岡崎市、瀬戸市、豊川市、豊田市、蒲郡市、新城市、幸田町、設楽町、東栄町、豊根村の11市町村	豊橋市、岡崎市、豊川市、豊田市、蒲郡市、新城市、設楽町、東栄町、豊根村の9市町村	豊橋市、岡崎市、瀬戸市、豊川市、豊田市、新城市、設楽町、東栄町、豊根村の9市町村
対象区域の区域分け	防衛ゾーン（分布域の拡大を防ぐ区域） 管理ゾーン（農林業被害等の防止とニホンザルの生息の維持を図る区域）	防衛ゾーン（分布域の拡大を防ぐ区域） 管理ゾーン（農林業被害等の防止とイノシシの生息の維持を図る区域）	<b>拡大防止エリア（分布域及び被害拡大を防ぐ区域）</b> <b>被害防止エリア（安定的な維持を図りながら農林業被害の防止を徹底する区域）</b>	捕獲区域は旧北設楽郡内に設定する捕獲団地に限定
捕獲目標	加害レベルから判断し、加害個体群及び加害個体を中心に捕獲する。	対象区域内の農作物等被害金額の削減を目指して捕獲を実施する。	生息密度超過地域の生息密度は3頭/k㎡、非超過地域は生息密度の維持を図る。	加害個体又はその可能性の高個体を選択して捕獲する。
捕獲目標頭数	加害個体は200頭程度 加害個体群は検討会において別途検討	捕獲実績や被害状況を考慮し、協議会・検討会で計画数を検討する(約5,000頭程度を目安とする)。	捕獲実績や被害状況を考慮し、協議会・検討会で計画数を検討する(約1,400頭程度を目安とする)。	記載せず
特例休猟区の設定		対象区域内では休猟区はイノシシの狩猟が可能な特例休猟区に原則指定	対象区域内では休猟区はシカの狩猟が可能な特例休猟区に原則指定	
狩猟者の確保	狩猟免許試験の年2回開催や狩猟免許更新検査の開催回数を増やすことにより、狩猟者数の増加を図る。 また、法人(JA等)による個体数調整については、狩猟免許を有しない者を捕獲に参加することを認め、狩猟者の負担軽減を図る。			

### (3) 弥富野鳥園の管理・運営【自然環境課】

弥富野鳥園は、野鳥の生息地の保全と野鳥保護に関する知識の普及を図ることを目的として設置され、傷病鳥の保護、野鳥の観察等を通じた野鳥の保護思想の普及啓発とともに、園内の鳥類生息調査、鳥類標識調査の実施など保護管理から調査研究までの幅広い役割を担っています(表9-2-8)。

昭和50年5月の開園以来毎年多数の人に利用され、平成25年度は約5万8,000人が訪れました。4～5月の大型連休、愛鳥週間、夏休みなどには、野鳥保護思想の普及啓発事業として、探鳥会や野鳥写真展などの行事を実施しています。

また、県民から持ち込まれた傷病鳥は保護し、回復したものは野生復帰させています(表9-2-9)。

近年、園内においてカワウが多数生息するようになり、樹木の枯死や他の野生鳥類の生息環境への影響が危惧されるようになってきています。このため、生息数や営巣数の調査を継続して実施するとともに、カワウと他の野鳥との共生を図ることを目的として、防鳥ロープを張るなどカワウ対策を実施しています。

表9-2-8 弥富野鳥園の施設概要と事業内容

所在地	弥富市上野町2-10
主な施設	野鳥保護地(樹林地、池等) 32.73ha 小公園(管理事務所、駐車場、芝地等) 2.92ha
主な事業内容	①施設管理 野鳥のための樹林地や池の管理、公園の草刈や管理 ほか ②普及啓発 本館での野鳥観察の指導、保護地内での探鳥会の開催など各種イベントの実施 ③鳥類の保護 傷ついた鳥の保護や野鳥の生息調査の実施
運営団体	(指定管理者) 公益財団法人愛知公園協会



探鳥会

表9-2-9 弥富野鳥園における傷病鳥の保護実績(平成25年度)

(単位:羽)

放鳥	死亡	その他	合計
36 (24種)	55 (22種)	26 (15種)	117 (41種)

(注) 1 「その他」の例:保護飼養中、他施設移送など  
2 種数には重複があるため、合計とは一致しない。  
(資料) 環境部調べ

## 5 緑化

### (1) 緑化の推進【森林保全課】

森林や樹木などの緑は、人々に潤いと安らぎを与えると同時に、快適な生活環境を構成する要素として、また、私たちの多様な活動の基盤として、年々その重要性を増しています。

このため、県は、「第5次愛知県緑化基本計画」に基づき、「緑をふやす」、「緑にしたしむ」、「緑をひきつぐ」、「緑をささえあう」の緑化推進の4つの柱を定め、公園緑地や道路、河川、学校等の公共施設の緑化、市町村及び民間事業者等の緑化事業への助成、県民意識の高揚、緑化木の生産振興等を通じて「みんなで支える多様で豊かなあいちの緑」を目指しています。

#### ア 緑化推進地区における緑化【森林保全課】

緑豊かで快適な都市の生活環境を整備するため、県は、昭和48年に制定した自然環境の保全及び緑化の推進に関する条例に基づき指定した緑化推進地区内で緑化推進事業を実施し、地域の緑化の推進を図っています。

この事業は市町村の緑化事業に対して助成するもので、平成25年度は、緑化推進事業で3か所、約2千本の植栽、保存樹木等維持管理事業で8件の維持管理に助成しました。

#### イ 工場緑化【産業立地通商課】

工場立地法は、工場立地が周辺地域の生活環境との調和を図りつつ適正に行われることを目的として、一定規模以上の工場等(特定工場)の新設・変更をしようとする場合の事前の届出を義務付けています。

この法律<sup>\*</sup>の規定により、工場敷地面積に対し20%以上の緑地を設置するよう指導が行われてい

ます。

※ 地域準則条例により緑地面積率を独自に定める場合を除く。

#### ウ 道路の緑化【道路維持課】

道路の「みどり」は、歩道やその周辺に緑陰をつくり、道路利用者や沿道住民に快適な空間を提供するとともに、親しみと潤いのある道路環境を創出するうえで大きな役割を果たしています。

平成26年4月1日現在の道路の緑化延長は770kmで、これは道路延長4,629kmの16.6%に相当します。

#### エ 河川の緑化【河川課】

河川における豊かな生態系と自然景観の創出を図るため、県は、平成9年度から、治水上支障のない河川沿いに地域の人々が参加して植樹する「水辺の緑の回廊」整備事業を行っています。平成25年度は逢妻男川、矢田川で植樹を行いました。

また、河川の改修に当たっては、河川全体の自然の営みを視野に入れ、地域の暮らしや歴史・文化との調和にも配慮しながら、河川が本来有している生物の生息・生育・繁殖環境並びに多様な河川風景を保全あるいは創出する「多自然川づくり」を進めています。

#### オ 港湾の緑化【港湾課】

人々が親しみやすい快適な水辺空間を形成し港湾における快適な環境の創出を図るため、県は、臨海部の特性を生かした緑地の整備を行うなど港湾空間の緑化を進めています。

#### (2) 都市づくりにおける緑化推進【公園緑地課】

我が国は、昭和30年代以後の急速な経済発展に伴い、産業と人口の急激な都市集中が進み、市街地の過密化や郊外の無秩序な開発をもたらしました。その結果、都市の緑が減少し身近な自然が失われました。

都市における生活環境を潤いと安らぎのある快適なものにするためには、身近な自然とのふれあい、スポーツなどによるリフレッシュ、災害時の避難空間の確保、さらには景観上の効果といった緑の効用を再認識し、できるだけ緑を確保するように努めることが重要です。

県は、平成6年に国が策定した「緑の政策大綱」に基づき、市町村の「緑の基本計画」策定を支援してきました。また、都市公園等の施設緑地の整備、風致地区及び特別緑地保全地区等の指定による地域制緑地の確保、公共施設の緑化、さらには住民自身による緑化の推進まで、それぞれの地域の状況、特徴を生かした公園の整備、緑地の保全、緑化の推進を総合的かつ計画的に推進するよう努めており、平成23年度には新しい「愛知県広域緑地計画」を策定しました。

また、平成21年度からは「あいち森と緑づくり事業」を実施し、都市の緑の保全・創出による緑のまちづくりを進めています

#### ア 都市公園・緑地の整備

県は、愛知県広域緑地計画において、平成32年度を目標年次として県民一人当たり都市公園面積を7.9㎡以上とする整備目標を掲げています。

平成24年度末現在の県民一人当たり都市公園面積は7.51㎡であり、現在、この目標達成を目指して都市公園整備を進めており、平成25年度は、大高緑地、小幡緑地、尾張広域緑道、東三河ふるさと公園、愛・地球博記念公園、油ヶ淵水辺公園の県営6公園の整備を進めたほか、市町村所管の公園30か所について整備促進を図りました。

#### イ 民有地の緑化

緑あふれる潤いのある街並みを形成するためには、都市公園等の整備とともに市街地の過半を占める民有地の緑化が重要であり、県は、県民の理解と協力を得ながら、以下の施策によりその推進を図っています。

#### (ア) 緑地協定（都市緑地法）

良好な環境を確保することを目的として、県は、一定規模の区域内の土地所有者全員の合意により自らの土地に植栽する樹木の種類や場所、垣根の構造などを定め市町村長の認可を受ける緑地協定の締結の促進を図っています（平成25年度末：4市15協定）。

#### (イ) 都市緑化基金

県民の手による都市の緑化を推進するため、県は、市町村都市緑化基金への助成、普及啓発活動、

調査研究を行う「愛知県都市緑化基金」の造成を推進しています。平成25年度末の造成額は約8億108万円です。

なお、市町村においては18市（平成25年度末）で都市緑化基金が設置されており、県としてもその設置の促進を図っています。



都市公園整備事業（愛・地球博記念公園）

表 9-2-10 都市公園の現況

公園の種類、種別		箇所数	面積 (ha)	都市計画区域内 人口1人当たりの 公園面積 (㎡/人)
住区基幹公園	街区公園	3,519	853.74	1.16
	近隣公園	316	539.00	0.73
	地区公園	83	419.24	0.57
都市基幹公園	総合公園	38	765.16	1.04
	運動公園	48	580.11	0.79
特殊公園	風致公園	19	294.2	0.40
	動植物公園	6	193.44	0.26
	歴史公園	20	33.61	0.05
	墓園	12	168.89	0.23
緩衝	緑地	10	74.22	0.10
大規模公園	広域公園	9	820.52	1.11
	レクリエーション都市	0	0.00	0.00
都市	緑地	285	529.11	0.72
都市	林	3	5.78	0.01
緑	道	58	152.39	0.21
国営	公園	1	98.88	0.13
広場	公園	29	3.27	0.00
合計		4,457	5532.26	7.51

(注) 平成25年3月末現在

(資料) 都市公園等整備現況調査

### (3) 緑化の推進に関する普及・啓発等【森林保全課】

#### ア 緑化運動の推進

緑豊かで活力のある県土を築くため、県は、公益社団法人愛知県緑化推進委員会や市町村等と協力して、県民参加の緑化運動を展開するなど緑化思想の普及啓発に努めています。

平成25年度は、「春の緑化強調期間」（4月1日～5月31日）及び「秋の緑化強調期間」（9月1日～11月15日）を設定し、愛知県植樹祭や各種の運動を実施するとともに、5月4日のみどりの日に県民と緑とのふれあいを促進する啓発行事を

開催しました。

#### イ みどりの少年団の育成

次代を担う青少年が、自然とのふれ合いを通じて緑の大切さを体験し情操豊かな人間に育つよう、県は、公益社団法人愛知県緑化推進委員会と協力して「みどりの少年団」の育成に努めています。平成26年1月末現在、県内では70団3,943人のみどりの少年団が活動しています。

#### ウ 緑化に関する技術・知識の普及指導

緑化を積極的に推進するために必要な知識の向上を図るため、県は、愛知県緑化センターにおいて、県・市町村・学校・企業・みどりの少年団及

び一般県民を対象とした緑化研修・みどりの教室・野外教室等を実施しました（平成25年度は延べ68日、受講者延べ2,982人）。また、一般県民が緑化に関する技術・知識を得られるよう緑化相談コーナーを設置して相談指導に当たりました（平成25年度は相談件数2,024件）。

さらに、植木の生産振興を図るため、愛知県植木センターにおいて、植木生産者・造園業者に対する技術研修（平成25年度は延べ68日、受講者延べ2,067人）、植木生産、植栽維持管理等の相談に対する指導を行いました（平成25年度は相談件

数282件）。

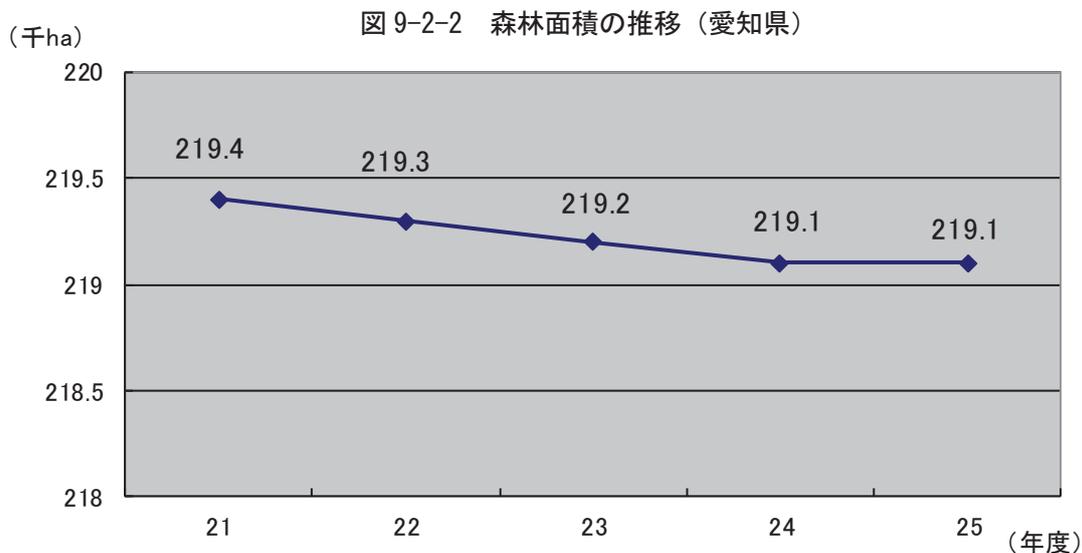
## 6 森林・里山・農地の保全等

### （1）森林の保全等

#### ア 森林の現況【林務課】

本県の森林面積は約22万haで、これは県土面積の約43%を占めています。

なお、過去数年間の森林面積の推移は図9-2-2のとおりで、他用途への転用により減少傾向にあります。



（資料）農林水産部調べ

#### イ 森林の整備

##### （ア）造林・間伐対策の推進【森と緑づくり推進室】

県は、森林の持つ機能を高度に発揮させるため、植栽から下刈、除伐、間伐などの保育作業に至る一貫した森林の造成・整備や、快適かつ安全に森林・林業に親しめるような保健、文化、教育的機能を有する森林の整備にも努めています。

特に、間伐は造林木の健全な育成に不可欠であり、水源の涵養（森林の土壌の中に水を蓄え、少しずつ川へ流す働き）や生物多様性の保全、二酸化炭素の吸収等の多面的機能の高い森林を造成する上において極めて大切な作業です。

平成25年度は、造林補助事業等により4,296haの間伐を実施するなど、森林整備の推進に努めました。

##### （イ）治山事業の推進【森林保全課】

県では、山地における崩壊地の復旧、荒廃の未然防止、森林の持つ水源涵養等の公益的機能の向上及び生活環境の保全等を図るため、平成25年度、公共治山事業を90箇所を実施しました。また、単県治山事業により、小規模な荒廃地の復旧・予防を79箇所を実施し、森林の保全に努めました。



治山事業（田原市 改植工）

### (ウ) 水源基金による森林整備の推進【土地水資源課】

県は、昭和 52 年度に、矢作川流域や豊川流域の関係市町村と協力して公益財団法人矢作川水源基金と公益財団法人豊川水源基金を設置し、上流域の水源林の保全・整備に取り組んでおり、平成 23 年度から平成 27 年度までの 5 か年を事業期間とする「第 7 期水源林対策事業」を実施しています。平成 25 年度には、上流域の市町村等が実施する間伐（約 650ha）や作業路新設などの事業に対して基金から助成しており、その財源の一部を県が負担しています。

### (エ) 企業の森づくり【林務課】

県では、平成 19 年度から「企業の森づくり事業」を実施しています。この事業は、県と協定を締結した企業が県有林において社会貢献活動を目的とした森林整備・保全活動を行うもので、平成 25 年度までに延べ 17 社の企業と協定を締結しています。

活動の内容は、社員やその家族による間伐や枝打ちなどの森林整備だけでなく、森林環境に関する学習活動などにも取り組んでおり、県と企業の連携や参加者の情報交換・交流を通じた森づくりを目指しています。



森林学習（瀬戸市白岩町）

### ウ 森林の開発規制【森林保全課】

保安林は私たちの暮らしを守るために重要な役割を果たす森林であり、やむを得ない事情がある場合を除いて開発は認められていません。

また、保安林以外の森林の開発は、周辺の地域に災害等を発生させるようなことがないよう、1 ha を超える場合に県の許可が必要となっています。

### (2) 里山の保全等【森林保全課、環境政策課、自然環境課】

里山は、希少種を含む多くの動植物の生息・生育の場であるとともに、身近な自然とのふれあいや環境学習の場としての役割も担っています。

かつて里山は、薪炭や肥料を得るため利用されることにより維持されてきました。しかし、化石燃料の普及などに伴い、次第に人の手が入らなくなり荒廃が進んでいます。

このため、愛知万博の原点ともいえる「海上の森」の保全・活用を図るとともに、森林や里山に関する学習・交流の拠点として、愛知万博の瀬戸愛知県館を改修した本館と周辺森林内の遊歩施設からなるあいち海上の森センターを平成 18 年 9 月にオープンし、県民参加のもと、里山の保全と活用に向けた様々な事業に取り組んでいます。

また、「あいち森と緑づくり事業」により、里山の保全・再生などに取り組む団体の活動を支援しています。



あいち海上の森センター

### ア あいち海上の森センターでの先導的な取組の推進【森林保全課】

あいち海上の森センターでは、海上の森の保全を図るため間伐等の森林育成事業や里山整備事業を実施するとともに、海上の森・里山に関する展示、調査学習及び里山や自然の情報の発信を行っています。

また、里山への理解を深めるため、親子で森に親しみ、森の手入れ、里山の管理を体験する「里と森の教室」、海上の森の自然を学習する「調査学習会」などの「海上の森体験学習プログラム」を実施しています（平成 25 年度の参加者延べ 768 人）。

### イ あいち海上の森大学の開催【森林保全課】

森林や里山保全の実践者・指導者を育成するため、県は、平成25年7月から平成26年1月までの期間で「あいち海上の森大学」を開校しました。（平成25年度は「森林再生・里山文化」「国際交流」の2コース、修了者27人。）

### ウ 人と自然の共生国際フォーラムの開催【森林保全課】

持続可能な社会づくりを目指し、市民や活動団体の交流と情報交換を図るため、平成25年10月12日（土）に地球市民交流センター（愛・地球博記念公園内）で第7回人と自然の共生国際フォーラムを「子どもたちとともに考えよう、人と自然の共生」のテーマのもと開催しました（参加者約600人）。フォーラムに先がけ、審査により選ばれた学生団体など6つの活動団体による活動発表を基にグループディスカッションを行い、その結果をパネルディスカッションの議論につなげました。



パネルディスカッション



グループディスカッション

### （3）農地の保全等【農業振興課、農業経営課、農地計画課】

農地や農業水利施設は、食料の生産基盤として

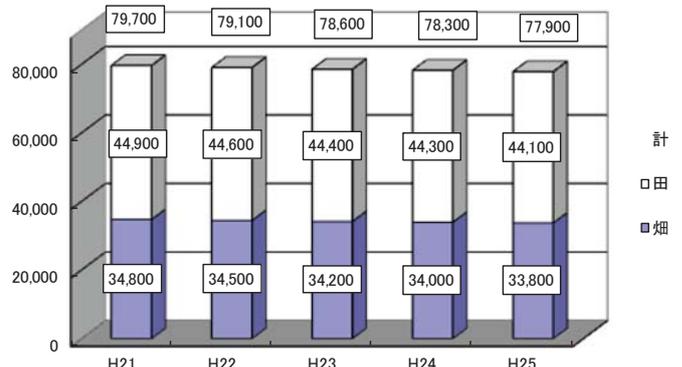
大きな役割を果たしていますが、そのほかにも、自然環境の維持を始め、洪水・山崩れ・土砂流出の防止、水源のかん養、水質浄化などの様々な機能を有しています。特に都市部で生活する人々にとっては、「ゆとり」や「やすらぎ」の場としての評価も高まっています。

このように、農地や農業水利施設は多面的な機能を持つことから、その保全や有効利用を図っていく必要があります。

### ア 農地の現況【農業振興課】

平成25年7月15日現在、本県の耕地面積は77,900ha（うち田44,100ha、畑33,800ha）で、農地以外への転用等によって耕地面積は減少傾向にあります（図9-2-3）。

図9-2-3 耕地面積の推移（愛知県）



（注）四捨五入により計と内訳が一致しない場合がある。

単位は ha

（資料）農林水産省調べ

### イ 農地の転用制限【農業振興課】

秩序ある土地利用を図るため、農地法では、農地を農地以外の用途に転用する場合には原則として農林水産大臣又は知事の許可を要して、農地の転用を制限しています。特に、農業振興地域の整備に関する法律により定められた農用地区域内の農地（集团的優良農地、土地改良事業等の公共投資の対象となった農地等）の転用は厳しく制限されています。

農地の転用面積は、平成4年の1,376haをピークとして減少傾向にあり、平成25年は617haとなっています。このうち、市街化区域外の農地を対象とした許可面積は221ha、市街化区域内の農地を対象とした農業委員会への届出面積は363haと

なっています。

なお、転用用途としては「住宅用地」の割合が最も多く、49.0%となっています。

#### ウ 環境保全型農業の推進【農業経営課】

県は、環境の保全と農産物の安全確保を目指す「愛知県環境と安全に配慮した農業推進計画」により、市町村及び関係団体と一体となって、化学肥料や化学合成農薬の使用量の低減等に取り組んでいます。

化学肥料の低減としては、長期にわたって緩やかに肥料成分が溶け出す肥効調節型肥料を用いた全量基肥施肥技術の普及を進めており、この技術は、水稻で広く普及し、トマト、キュウリ等の施設野菜でも普及が進んでいます。化学合成農薬の低減としては、病害虫抵抗性品種の育成・利用、病害虫発生予察の活用、天敵、性フェロモンの利用等を推進しています。

また、家畜排泄物については堆肥化を図り、土づくり資材及び化学肥料代替資材としての利用促進に努めています。

こうした化学肥料・化学合成農薬の低減、有機物による土づくりに一体的に取り組もうとする農業者を、県では「エコファーマー」として認定・支援しています。

#### エ 農業農村多面的機能支払事業の推進【農地計画課】

農村地域の農地や農業水利施設等はこれまで農家を中心として管理が行われてきましたが、農家の高齢化や混住化等により、適切な保全が困難になりつつあります。また、県民の価値観がゆとりや安らぎを求める方向に変化し、農業生産についても環境保全を重視することが求められています。

そうした中、農村地域における農地や農業水利施設の良好な保全と質的な向上を図るため、県は、地域ぐるみでこれら施設を守る取組を行う地元活動組織に対して平成19年度から支援しています。

平成25年度は、農家や自治会などで構成する県内317の活動組織が、水路の草刈りや泥上げ、農業体験を通じた環境学習、農道沿いの植栽、生き

もの調査、生物多様性等の地域環境の保全に資する高度な活動などの取組を行いました。



農業体験を通じた環境学習  
(三和の美しい環境を育む会(西尾市))

#### オ 環境保全型農業直接支援対策の推進【農業経営課】

県では、地球温暖化防止や生物多様性保全に効果の高い営農活動の普及拡大を図るため、平成23年度から「環境保全型農業直接支援対策」を実施しています。この対策では、環境保全型農業の取組に対して幅広く支援しています。

#### カ 農業用ため池の保全【農地計画課】

かんがい用の水源として造られたため池は、大雨の際の洪水調節の機能を持つほか、豊かな水辺環境を形成し多種多様な生きもののすみかを提供するなど、多くの重要な役割を果たしています。このような役割を果たすため池を保全するため、県は、平成19年4月に「愛知県ため池保全構想」を策定しました。

この構想では、ため池の歴史や生い立ち、多面的機能を啓発するとともに、行政と地域が連携を図り、さらに多面的機能を維持・増進させ、ため池の保全を図ることとしています。



ため池保全のための池干しの様子  
(知多郡美浜町 姥八反田池)

また、ため池の多くの役割を PR するため、県政お届け講座「ため池とは ～ こんなにあるの ため池の役割 ～」を登録し、県民の皆様へ、ため池の役割、多面的機能等を説明し、ため池の大切さを PR しています。



県政お届け講座で多面的機能を紹介

#### （４）大規模な宅地の造成などの規制【自然環境課】

自然環境の保全及び緑化の推進に関する条例の規定により、自然公園、自然環境保全地域、特別緑地保全地区等の区域を除いた区域で1haを超える大規模な宅地の造成等の行為は、知事への届出が義務づけられており、自然環境の破壊の防止及び植生の回復が図られています。平成25年度は31件の届出がありました。

#### （５）都市における自然環境の保全【公園緑地課、都市計画課】

緑豊かな都市環境の形成を図るためには、公園整備のように積極的に緑を作り出していくとともに、残されている緑を保全することも必要です。県は、樹林・水辺などを公園・緑地領域に取り込み、保全緑地又は人の利用できる緑地として整備を図っているほか、特別緑地保全地区、風致地区、生産緑地地区の地区指定や保存樹、保存樹林の樹木指定等の緑の保全のための法制度を活用するなど、都市計画の観点からの保全策を進めています。

#### （６）都市と農山漁村の交流の促進

##### ア 地産地消の推進【食育推進課】

「生産者の顔の見える農林水産物」を求める消費者の声が高まりつつあり、その地域で生産されたものをその地域で消費する「地産地消」の取組が広がっています。併せて、「地産地消」は生産地から食卓までの距離が短く、環境にも優しい取組

として注目されています。

県は、平成10年度から「地産地消」の取組として、消費者と生産者との「いい友」関係を築き交流を深めてもらうとともに、消費者の方に地元の農林水産物を積極的に購入してもらうことを通じて、健康で豊かな暮らしを目指す「いいともあいち運動」を展開しています。

この運動の一環として、趣旨に賛同する生産から流通、消費等にかかわる方を会員とし、会員相互の連携による活動を高めるネットワーク（1,202会員、平成25年度末）の形成や、地元の農林水産物を積極的に販売・利用する「いいともあいち推進店」（906店舗、平成25年度末）の登録を進めています。

平成25年度は、県産農林水産物の消費促進をアピールするため、ネットワーク会員等の県産農林水産物を使った商品へのいいともあいち運動のシンボルマークの貼付をしてもらったり、平成25年11月14日（木）から19日（火）までの6日間、丸栄（名古屋市中区）において「あいちの農林水産フェア」を開催し、県内各地で収穫された新鮮な農産物の即売会や県産農林水産物を使った加工食品の紹介と展示・販売などを行いました。

今後はこれらの取組をさらに充実させ、いいともあいち運動の認知度向上、県産農林水産物の利用拡大に取り組んでいきます。



あいちの農林水産フェア

## イ グリーン・ツーリズムの推進【農業振興課】

「グリーン・ツーリズム」とは、緑豊かな農山村地域において、その自然・文化・人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動のことです。

県は、農山漁村の風景、人、食、文化などと、農林水産物を加工する「モノづくり」を地域資源として一体的にとらえ、これらを体験・体感する「観光」を通して、都市と農山漁村の交流を推進しています。農林漁業体験施設などの都市農村交流資源をデータベース化するとともに、それぞれの資源を組み合わせたモデルルートを作成、ウェブページにより広く紹介しています。

## ウ エコツーリズムの推進【自然環境課】

「エコツーリズム」とは、観光旅行者が、動植物の生息・生育地や、自然環境と深くかかわる生活文化などの自然観光資源について知識を有する者から案内又は助言を受け、その保護に配慮しつつ触れ合い、これに関する知識及び理解を深めるための活動のことです。

エコツーリズム推進法（平成20年4月施行）及び同法に基づく「エコツーリズム推進基本方針」（平成20年6月閣議決定）により、総合的・効果的な推進が図られています。

県民にエコツーリズムに親しんでもらうことを目的として、県は、平成19年3月、市町村や関係団体の協力を得て「あいちエコツアーガイド」を作成し、エコツーリズムの普及・啓発に努めています。

## 7 あいち森と緑づくり事業

### （1）あいち森と緑づくり事業【森と緑づくり推進室】

森と緑は、地球温暖化の防止、水源のかん養、生物多様性の保全、災害防止など多面的な公益的機能を有しています。県内には、三河山間部を中心とする森林、名古屋圏を中心とする都市の緑、その中間に位置する里山と、様々な形で森と緑が存在していますが、近年の手入れ不足の森林の増加や都市の緑の減少・喪失に伴い、その公益的機能の低下が危惧されています。

県は、森と緑を「県民共有の財産」として位置づけ、「森林（人工林）」、「里山林」、「都市の緑」を一体的に整備、保全し、「山から街まで緑豊かな愛知」を実現するため、あいち森と緑づくり税を活用した「あいち森と緑づくり事業」を実施しています。

### ア 森林（人工林）整備・里山林整備事業【森と緑づくり推進室】

人工林整備としては、林業活動では整備が困難な奥地林や公道・河川沿い等の人工林を対象に、平成25年度は岡崎市始め9市町村において、奥地林1,286ha、公道・河川沿い等527ha、合わせて1,813haの間伐を実施しました。里山林整備としては、長期間放置された都市近郊の里山林を対象に、平成25年度は県営事業を春日井市始め6市町の13箇所、市町村交付金事業を名古屋市始め9市町の18箇所、合わせて31箇所で行いました。



人工林整備事業（公道沿い）

### イ 都市緑化【公園緑地課、道路維持課】

都市の緑化を目的とする事業には市町村、民間、及び市民団体が行う次の4つの事業があります。

- ① 身近な緑づくり事業：市街地やその近郊で既存樹木の保全や新たな緑地の創出を行う。
- ② 緑の街並み推進事業：市街地やその近郊で民有地の建物や敷地の緑化を行う。
- ③ 美しい並木道再生事業：都市の顔となる地区で美しい並木道を再生する。
- ④ 県民参加緑づくり事業：県民参加による樹林地整備やビオトープづくりなどの緑づくり活動への支援や講師の派遣を行う。

平成25年度は、名古屋市、豊田市、安城市をはじめ県内38市町に交付金を交付し、県民参加緑

づくり事業では延べ約 25,000 人が約 47,000 本の植樹を行いました。



県民参加緑づくり事業

### ウ 環境活動・環境学習の推進【環境活動推進課、自然環境課】

市町村や NPO、地域の団体等が実施する自発的な森と緑の保全活動や環境学習を支援するため、平成 25 年度は次のような活動に対し、交付金を交付しました。

- ・ 間伐や植樹など、健全な緑の保全・育成を実施する「環境保全活動」
- ・ 水と緑の恵みや森林文化、森林生態系保全について学ぶ「環境学習」
- ・ 緑のカーテンの育成などを通じて太陽や自然の恵みを学ぶ「緑の教室」

これにより、106 事業の応募の中から採択された 95 事業が実施され、延べ 12 万 4 千人の皆さんが参加しました。

平成 26 年度からは、多様な主体の協働による生態系ネットワーク形成の取組を新たに対象事業に加え、支援します。



環境活動・学習推進事業

### エ 普及啓発【森と緑づくり推進室】

普及啓発事業として、公立小中学校の学習机・椅子等に愛知県産材の木材を使用した製品を導入するのに必要な経費の一部を市町村に交付する事業である「木の香る学校づくり推進事業」を行い、平成 25 年度は名古屋市始め 19 市町村で計 15,853 セットと机 542 台、椅子 299 台、天板取替 1,280 台、下駄箱・ロッカー等 745 台、腰壁・床材 368 m<sup>3</sup>を導入しました。その他、森と緑づくりシンポジウム・体感ツアーの実施、ウェブページでの公表、コンビニエンスストアやイベント時のポスター掲示やパンフレット設置・配布、テレビ・ラジオ・新聞等各種媒体を利用した広報等により、県民の方々へ、森と緑の重要性、整備の必要性等について理解促進のための普及啓発を行いました。



木の香る学校づくり推進事業

### (2) あいち森と緑づくり税の導入【税務課、森と緑づくり推進室】

あいち森と緑づくり事業の推進に必要な財源を確保するため「あいち森と緑づくり税」を創設することとし、平成 20 年 2 月県議会において、税を賦課徴収するためのあいち森と緑づくり税条例と、用途の明確化を図るとともに寄附金を受け入れるためのあいち森と緑づくり基金条例が制定されました。

あいち森と緑づくり税は、平成 21 年度から県民・企業の方々に負担いただいています。

あいち森と緑づくり環境活動・学習推進事業は、あいち森と緑づくり税を活用して、市町村、NPO、地域の団体等が行う森と緑の保全活動や環境学習などの取組に対し交付金を交付することにより支援し、その取組をより一層進めようとするものであり、21～25年度の5年間で416件の事業を実施し、延べ33万人以上が参加しました。

これまで、平成21年3月に策定した「あいち森と緑づくり事業計画」に基づき、10年計画で事業を実施してきましたが、平成24年度に行った「あいち森と緑づくり委員会」等による事業評価の結果などを踏まえ、平成26年3月に事業計画の見直しを行い、環境活動・学習推進事業を拡充しました。

【事業評価結果の主な内容】

事業に対する意見、要望	<ul style="list-style-type: none"> <li>・環境活動が持続し自立できるような誘導が必要。</li> <li>・環境学習は効果をあげており、助成枠の拡大を。</li> <li>・今後も、交付金事業を続けてほしい。</li> </ul>
課題と今後の方向性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生態系ネットワークの取組との連携</li> <li>・より質が高く効果的な取組や県民の参加交流につながる取組</li> </ul>

【事業計画見直しの主な内容】

- 21～30年度の10年間で、対象事業を500件から900件へ、事業費を3億円から6億円にそれぞれ拡大。
- 事業の種類に、生態系ネットワーク形成事業を追加。
- 県民参加をより促すため、事業実施団体等に対して、活動に必要な情報やノウハウを身につけるための講習会等を新たに実施。

あいち森と緑づくり環境活動・学習推進事業の種類

事業の種類	事業内容の例
① 森・緑の育成活動事業	間伐・除伐及び植樹や、野生動植物の保護・保全 等
② 森・緑の育成活動の取組立ち上げ事業	里山整備計画作成、保全活動協定締結 等
③ 水と緑の恵み体感事業	水源の緑を訪ねる現地見学や生活体験を通して水と緑の恵みを学ぶエコツアー 等
④ 森林文化の体験・学習事業	山村と都市の交流を通して森林文化を学ぶ講座 等
⑤ 森林生態系保全の学習事業	森林作業体験、自然観察会、工作教室などを通じた環境学習 等
⑥ 太陽・自然の恵み学習事業	「緑のカーテン」など植物の生育実習と地球温暖化について学ぶ講座 等
⑦ 独自提案による環境保全活動・環境学習事業	①～⑥に該当しない、創意工夫を凝らした独自の生物多様性に関連した環境保全活動・環境学習事業
<p>&lt;平成26年度から新たに追加&gt;</p> ⑧ 生態系ネットワーク形成事業	複数の主体の連携による、生きものの生息生育環境をつなぐ生態系ネットワークを形成するためのピオトープの創出や維持・向上事業 等

## 8 景観、温泉、天然記念物等

### (1) 美しい景観の形成【公園緑地課】

近年、産業や社会構造の変化に伴い人々の生活や景観に対する意識が変わり、地域のまちづくりに積極的に参加する人々が増えつつあります。また、企業においても、地域の景観形成への貢献を企業の社会的責任として認識し、緑化や建築物のデザイン、屋外広告物への配慮等、景観形成に向けた主体的かつ積極的な取組が始まっています。

しかし、まちの様子を見てみると、無秩序な屋外広告物、形態や意匠等が不ぞろいなまちなみ等が見られるところもあります。このような状況を放置すれば地域の魅力的な景観が徐々に失われていくのではないかと懸念されています。

国は、平成15年に策定した「美しい国づくり政策大綱」において、従来の景観形成に対する反省を踏まえたうえで良好な景観形成を国政上の重要課題として位置づけ、平成16年には、美しい景観・豊かな緑の形成を促進するための景観緑三法を整備しました。

県は、平成18年3月、景観形成に関する基本的な考えを示す「美しい愛知づくり基本方針」を策定し、同時に、その基本理念及び施策の基本となる事項を定めた美しい愛知づくり条例を制定しました。

そして、この基本方針を踏まえるとともに、条例に基づき、美しい愛知づくりに関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るため、平成19年3月に「美しい愛知づくり基本計画」を策定し、総合的な景観施策を実施しています。

平成25年度には、良好な景観形成に関する取組の一環として、愛知まちなみ建築賞、緑豊かな美しい愛知づくり講演会、環境デザイン夏季講座等の普及啓発活動等を実施しました。

### 【平成25年度主な実施事業】

#### ○愛知まちなみ建築賞

大賞受賞作品：尾張一宮駅前ビル

#### ○緑豊かな美しい愛知づくり講演会

豊川市（平成25年11月19日、参加者約130名）

#### ○環境デザイン夏季講座

岡崎市（平成25年8月28日・29日、参加者約30名（行政職員対象））

### (2) 温泉資源の保護と可燃性天然ガスによる災害の防止及び温泉の利用【自然環境課】

#### ア 温泉法に基づく許認可等

温泉法は、温泉を保護するとともに、温泉の採取等に伴い発生する可燃性天然ガスによる災害を防止し、その適正な利用を図ることを目的としています。県は、温泉の掘さくなどについて、温泉のゆう出量、温度若しくは成分、その他公益を害するおそれに関する実地調査や市町村への意見照会などにより審査し、愛知県環境審議会の意見を聴いた上で許可しています。

平成25年度の温泉法に基づく許可件数は、掘削3件、動力1件、温泉採取のための施設等変更3件、温泉の利用9件（保健所設置市の許可件数を除く。）となっています。

#### イ 可燃性天然ガスの安全対策

改正温泉法（平成20年10月1日施行）に可燃性天然ガスの安全対策が盛り込まれましたが、改正法施行時に災害防止対策等が必要であった本県の既存源泉数は104源泉でした。

このうち55源泉については、可燃性天然ガス濃度が基準未満であったため、災害防止対策が不要であるとの確認を行った上で温泉の採取を行っています。一方、ガス濃度が法の基準を超えた49源泉については、災害防止対策を講じた上で知事から温泉採取許可を受け、温泉の採取を行っています。

#### ウ 立入検査

源泉及び温泉利用施設について、温泉採取に伴う適切な災害の防止対策と温泉の適正な利用がなされているかどうかを確認するため、定期的に立入検査を行っています（表9-2-11）。

表 9-2-11 温泉源泉数

(単位：か所)

所管別	利用源泉数			未利用源泉数			源泉数
	自噴	動力	計	自噴	動力	計	
愛知県(保健所設置市除く。)	2	65	67	6	19	25	92
名古屋市	-	12	12	2	1	3	15
豊橋市	-	-	-	-	1	1	1
岡崎市	-	1	1	-	1	1	2
豊田市	8	8	16	4	2	6	22
計	10	86	96	12	24	36	132

(注) 平成 26 年 3 月末現在

(資料) 環境部調べ

(3) 史跡・名勝・天然記念物の保護【文化財保護室】

文化財保護法及び愛知県文化財保護条例では、遺跡のうち歴史上・学術上価値の高いものを「史跡」として、庭園その他自然風景地のうち芸術上・観賞上価値の高いものを「名勝」として、動植物・地質鉱物のうち学術上価値の高いものを「天然記念物」として指定し、その保護を図っています(表 9-2-12)。

これらの指定文化財については現状での保護を原則としており、環境整備や状況調査等を含め、現状を変更する場合及びその保存に影響を及ぼす行為を実施する場合には、あらかじめ文化庁長官あるいは県又は市の教育委員会の許可を受けることが必要とされています。

平成 25 年度には、文化庁長官や県教育委員会の許可による現状変更が 61 件(国指定 47 件、県指定 14 件)、市教育委員会の許可による現状変更が 54 件(国指定 52 件、県指定 2 件)ありました。

また、文化財の現状や日常の管理のあり方を把握するため、県は、県内各地に 58 名の文化財保護指導委員を委嘱し、定期的にパトロールを実施してもらうとともに、委員からの報告に基づき適宜適切な措置を講じています。

特に、平成 22 年度から平成 23 年度にかけ、昭和 2 年に国の名勝及び天然記念物に指定された木曾川堤(サクラ)の樹勢回復事業を実施しました。木曾川堤(サクラ)は、一宮市から江南市にかけて全長 9km に及ぶエドヒガン・シダレザクラ・ヤ

マザクラの並木であり、指定から 80 年以上が経過して老化による衰弱が目立つため、樹勢回復作業や剪定・施肥など、管理作業を進めています。

表 9-2-12 史跡・名勝・天然記念物の指定状況

(単位：件)

指定区分	史跡	名勝	天然記念物	計
国指定	37	5	26	68
県指定	45	5	60	110
計	82	10	86	178

(注) 平成 26 年 3 月末現在

(資料) 教育委員会調べ

(4) 文化財保護に関する普及・啓発【文化財保護室】

文化財を保護することは、魅力ある歴史的環境を創出し、文化的感性豊かな社会を形成することでもあります。このため、県は、文化財保護指導委員を通じた市町村の保護活動の支援、文化財の保護事業や啓発活動に努めています。

平成 25 年度には、木曾川堤(サクラ)の樹勢回復作業に併せて、文化財を身近なものとして親しんでいただくために、愛知県立稲沢高等学校の協力を得て、サクラの観察や樹勢回復作業を体験してもらう「サクラ保護体験講座」を開催するなど、普及・啓発活動に取り組みました。

平成 26 年度も引き続き愛知県立稲沢高等学校の協力を得て、サクラ保護体験講座を実施していきます。



国指定名勝・天然記念物木曾川堤（サクラ）  
（一宮市・江南市）



稲沢高校による樹勢回復作業

### 第3節 生物多様性の保全と施策

#### 1 生物多様性の保全と持続可能な利用に向けた総合的な取組の推進【自然環境課】

##### （1）国の取組

1992年（平成4年）に採択された生物多様性条約は、第6条において生物多様性の保全と持続可能な利用を目的とした国家戦略の策定を各国に求めています。これに対して国は、平成7年に最初の生物多様性国家戦略を策定し、これを順次改訂しています。

平成20年6月には生物多様性基本法が施行され、生物多様性の保全及び持続可能な利用についての基本原則とその方向性を示すことによ

り関連する施策を総合的かつ計画的に推進しています。平成22年3月には法に基づく初めての生物多様性国家戦略となる「生物多様性国家戦略2010」が閣議決定されました。

そして、2010年（平成22年）10月には、環境分野としては世界最大規模の国際会議である生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）（カルタヘナ議定書第5回締約国会議（COP-MOP5）を含む）が愛知・名古屋で開催されました。

国では、これらの会議の成果である「愛知目標」を踏まえた「生物多様性国家戦略2012-2020」を平成24年9月に閣議決定しています。

## クローズアップ COP12で愛知県知事が「あいち方式」を世界に発信しました

2014年（平成26年）10月6日（月）から17日（金）にかけて、韓国の平昌（ピョンチャン）において、生物多様性条約第12回締約国会議（COP12）が開催されました。（前後して、カタールへナ議定書第7回締約国会議（COP-MOP7）及び名古屋議定書第1回締約国会議（COP-MOP1）も開催。）

この会議には、162の締約国・地域の代表者など3,000人以上が参加し、平成22年のCOP10で採択された愛知目標の中間評価などが行われました。

本県からは大村知事が参加し、COP12に並行して開催された生物多様性国際自治体会議や、本県の主催によりCOP12のサイドイベントとして開催したパネルディスカッション「2020年愛知目標の達成に向けて～サブナショナル政府の貢献～」において、本県の取組を世界に発信し、COP12の参加者から高い評価を得ました。

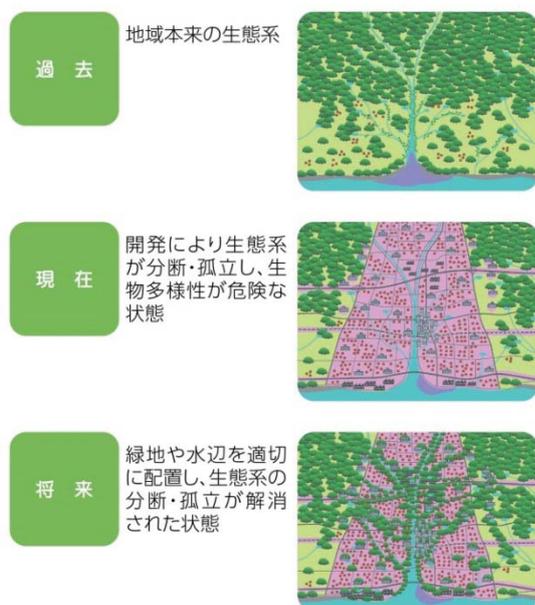


国際自治体会議での本県の取組発表

## (2) 県の取組

昭和48年に、高度経済成長期の乱開発から自然環境を保護することを目的とする**自然環境の保全及び緑化の推進に関する条例**を制定しました。この条例では、「自然環境保全地域の指定」、「大規模な宅地の造成等の規制」、「緑化の推進」の3つを政策の柱としていました。

その後、自然環境を取り巻く状況は変化し、平成19年3月には**愛知県環境審議会**から「今後の自然環境保全施策の基本的な方向」についての答申がありました。これを受け、県は、生物多様性を施策の基本理念に位置づけ、多様な生物が生息・生育できる生態系ネットワークの維持・形成、本県特有の希少野生動植物種の保護など、新たな政策を追加する条例改正を平成20年3月に行いました。この改正条例を受け、平成21年3月には、先導的な施策の行動計画である「**あいち自然環境保全戦略**」を策定しました。そして、平成25年3月にはCOP10で採択された生物多様性に関する新たな世界目標である「**愛知目標**」を踏まえ、「**あいち生物多様性戦略2020**」を策定しました。この戦略では、基本目標として「人と自然が共生するあいち」の実現を掲げており、2020年までに、「生物多様性の損失を止めるための具体的な行動の展開」を進めていくことにしています。



生態系ネットワークの形成

基本目標の「人と自然が共生するあいち」とは、本来その場所にいるであろう生きものと人が、共に生きていける状態です。

この目標を実現するためには、開発などで分断・孤立した生物の生息生育空間を緑地などでつないで、豊かな生物多様性をもった地域を作り上げる「生態系ネットワークの形成」が必要です。

本県では、この生態系ネットワークの形成を進めるための新しい仕組みを推進しています。それが「あいち方式」です。

具体的には、県民や事業者、NPO、行政といった地域の多様な主体が共通の目標のもとにコラボレーション（協働）しながら、効果的な場所で生物の生息生育空間の保全・創出の取組を行うことにより、生物多様性への意識を高め、人と人とのつながりを育みながら生態系ネットワークの形成を進め、「人と自然が共生するあいち」を実現する仕組みです。

あいち方式では、多様な主体のコラボレーション（協働）の場として、県内を9つの地域に分け、地域ごとに、生態系ネットワーク協議会を立ち上げるよう支援しています。

協議会では、生物の生息適地を示した地図（生物多様性ポテンシャルマップ）をもとに、話し合いにより地域の共通の目標を設定し、各主体自らが活動内容を確認しながら実施することで、生態系ネットワークの形成が効果的に行われます。

【あいち方式による生態系ネットワークの形成】



2 COP10の成果と愛知の取組【自然環境課】

(1) 生物多様性に配慮した行動の推進

地域の魅力～生物多様性セミナー

生物多様性に配慮した行動を推進するためには、県民の皆様にも本県の自然の魅力やその現状を知っていただき、生物多様性の保全を自らの問題として捉えていただくことが大切です。

そこで、平成25年7月から11月にかけて県

内6地域で、生態系ネットワークの形成を始める生物多様性の保全の内容を取り入れた自然体験型のセミナーをNPO等と連携・協働して実施し、延べ615名の方に参加していただきました。このセミナーを通じて、生物多様性の保全が私たちの暮らしにとって重要であることを県民のみなさんに体感していただきました。

【生物多様性セミナー実施事業（平成25年度）】

事業内容	実施日	実施事務所
東三河地域の魅力～生物多様性セミナー	7月27日(土)、9月21日(土) 10月6日(日)	東三河総局
2013生物多様性セミナー	8月10日(土)、8月24日(土)	東三河総局新城設楽振興事務所
尾張地域 生物多様性親子セミナー	9月7日(土)、9月21日(土)	尾張県民事務所
親子ふれ合い 自然観察、体験教室	7月28日(日)、10月26日(土)、 11月30日(土)	尾張県民事務所海部県民センター
身近な生き物たんけんたい	9月14日(土)、9月21日(土)、 10月5日(土)	尾張県民事務所知多県民センター
生物多様性親子バスツアー	7月31日(水)、8月9日(金)	西三河県民事務所

## (2) 多様な主体との連携

### ア 国内自治体間の連携・交流の促進

2010年(平成22年)10月、愛知・名古屋では、生物多様性国際自治体会議において「**地方自治体と生物多様性に関する愛知・名古屋宣言**」を発表し、COP10では「**都市と地方自治体の生物多様性に関する行動計画**」を承認するなど、生物多様性の保全に関して、地方自治体の役割の重要性が明確化されました。

そこで、COP10開催から1年を経た平成23年10月生物多様性自治体ネットワークが設立されました。これは、全国の自治体が都道府県、市町村の

枠を超えて参画し、他のセクターとの協働、自治体としての情報発信や成果の発表などを行うことを目的としており、平成26年10月現在で北海道から沖縄までの138自治体が参画しています。初代代表には大村愛知県知事が選出され、フォーラム等の啓発イベントの実施や自治体の取組情報のデータベース化等を行いました。平成24年11月からは横浜市長、平成25年11月からは豊岡市長に代表を交代しましたが、平成26年10月から再び本県知事が代表に就任し、取組を先導しています。

## クローズアップ

### 生物多様性自治体ネットワークフォーラム及び渥美半島エコツアーを開催しました

県では、環境省、国連生物多様性の10年日本委員会(UNDB-J)、生物多様性自治体ネットワークと合同で、平成26年10月24日(金)に、穂の国とよはし芸術劇場 PLATにおいて、「UNDB-J第4回生物多様性全国ミーティング&生物多様性自治体ネットワークフォーラム」を開催しました。

この「ミーティング&フォーラム」では、UNDB-Jキャラクター「タヨちゃんサトくん」と豊橋市キャラクター「トヨッキー」、「のんちゃん・ほいくん」が、今後協力して生物多様性に関する普及啓発に取り組むため「生物多様性キャラクター応援団共同宣言」を行い、地球生きもの応援団・生物多様性リーダーのさかなクンからは、海の生きものを題材とした生物多様性についてお話しいただきました。また、市民、企業、NPO、行政など多様な主体が愛知目標達成に向けて果たすべきそれぞれの役割をテーマとしたパネルディスカッション等を実施し、参加者に生物多様性の大切さを実感していただきました。

さらに、翌25日には、豊橋駅を起点に、渥美半島特有の自然環境スポットや供用開始されたばかりの伊良湖休暇村公園「いらごさららパーク」を訪ねる「渥美半島エコツアー」を行いました。

なお、「ミーティング&フォーラム」に先駆けて開催された第4回生物多様性自治体ネットワーク定期総会において、愛知県が代表に選出され、大村知事が今後とも生物多様性保全のための自治体の取組を推進していく旨を表明しました。



生物多様性キャラクター応援団共同宣言式



パネルディスカッション

## イ 企業などとの連携

### 茅原沢自然環境保全地域の保全活動

「茅原沢」(岡崎市)は、ヒメシャラ、トチュウヒメシャラ、オオズミといった広葉樹を数多く交えた森林が広がる、県内では他に例を見ない、極めて特色ある自然をもつ地域です。県は、昭和59年3月に茅原沢を自然環境保全地域に指定し、その保全を図ってきましたが、近年、急速にモウソウチク(外来種)がその分布を拡大し、貴重な自然環境が脅かされています。

県は、地域の住民の方々及びブラザー工業株式会社と茅原沢自然環境保全地域における活動に関する協定を締結し、学識者による専門的な助言を踏まえながら、地域の住民の方々、企業とともに、モウソウチクの駆除などの茅原沢自然環境保全地域の保全や環境学習活動を行っています。

平成25年秋にも、地元住民と協力してモウソウチクの伐採を行い、対象区域での竹の伐採を終了させるとともに、竹の子の発生状況を確認するための調査区域を設定しました。平成26年春には、調査区域内での発生状況を確認後、125本の竹の子を駆除し掘りたて竹の子の試食会を開催しました。

今後も竹の子の発生状況を確認しながら、地域住民と協力して竹の駆除を継続していきます。



モウソウチクの駆除

このような取組を通じて、生物多様性保全に関する社会貢献活動に関心を持つ企業と、企業の資源を活用した協働の活動を希望するNPO等との連携を推進していきます。

## ウ 国際的なパートナーシップへの参加

「SATOYAMA イニシアティブ国際パートナーシップ(IPSI)」第1回定例会合が、平成23年3月、名古屋大学において開催され、県も参画して生物多様性の保全のための先進的な取組である生態系ネットワークの形成について発表しました。

また、第4回定例会合は、平成25年9月に福井県で開催され、本県も会合への出席のほか、ポスターセッションへの参加を行い、本県の取組を発信しました。

「SATOYAMA イニシアティブ」とは、過疎化や地域に根差した一次産業の衰退により失われつつある里地・里山の価値を改めて見直し、持続可能な形で保全・利用していくためにはどうすべきかを考え、行動につなげようという国際的な取組です。

里地・里山の再活性化を通じて人と自然の良好な関係を構築することによって、世界的なレベルで進行する生物多様性の損失を減速させるとともに、人が自然に手を加え続けることで成り立っている環境における生物多様性の維持・向上及び持続可能な自然利用の促進を目指します。

### 3 今後の展開【自然環境課】

私たちの愛知には、山地から海岸へ変化に富んだ多様な自然があります。人々は、その自然を生かしながら暮らし、工業や農林水産業といった産業を発展させてきました。

COP10で定められた目標である「自然と共生する世界」を実現するためには、愛知の産業、学術、行政そして県民が協働して統合的な取組を進めていくことが不可欠です。一方で、私たち一人ひとりが毎日の暮らしの中で生物多様性の保全と持続可能な利用を意識した行動を実践していくことも重要です。

こうした考えを戦略的に地域づくりに生かしていくため、県は、平成25年3月に策定した「**あいち生物多様性戦略2020**」に基づき、生態系ネットワーク形成などの先導的施策を通じて自然と共生する社会の実現を目指します。